

スカラー重力理論

中嶋 慧

December 27, 2020

Abstract

この記事は、数理物理 Advent Calendar 2020 の 24 日目の記事である。重力がスカラー場 $\phi(x)$ で表されると仮定した重力理論を解説する。この理論では、近日点移動は一般相対論の $(-1/6)$ 倍となる。

Contents

1	質点と重力場との結合	2
2	重力場の方程式	2
3	近日点移動	4
3.1	一般論	4
3.2	一般相対論での近日点移動	4
3.3	スカラー重力理論での近日点移動	5
A	$g_{\mu\nu} = \varphi^2 \eta_{\mu\nu}$ に対するスカラー曲率	6
B	近日点移動 : 詳細	9

1 質点と重力場との結合

このノートでは重力はスカラー場 $\phi(x)$ で表されると仮定する。時空は平坦で、計量はミンコフスキー計量 $\eta_{\mu\nu} = \text{diag}(-1, 1, 1, 1)$ だとする。

質量 m , 重力質量 m_G の質点の作用は、

$$S = - \int d\tau (mc^2 + m_G\phi) \quad (1.1)$$

である [1]。ここで、 $d\tau$ は固有時

$$d\tau^2 = -\frac{1}{c^2}\eta_{\mu\nu}dx^\mu dx^\nu \quad (1.2)$$

である。(弱い)等価原理より、 $m_G = m$ として、

$$S = -mc^2 \int d\tau \left(1 + \frac{\phi}{c^2}\right) \quad (1.3)$$

である。

今、「計量」を、

$$g_{\mu\nu} := \left(1 + \frac{\phi}{c^2}\right)^2 \eta_{\mu\nu} \quad (1.4)$$

と定義すると、

$$S = -mc^2 \int d\lambda \sqrt{-\frac{1}{c^2}g_{\mu\nu} \frac{dx^\mu}{d\lambda} \frac{dx^\nu}{d\lambda}} \quad (1.5)$$

となる。 λ は適当なパラメーターである。

2 重力場の方程式

重力場のラグランジアン密度は、

$$\mathcal{L} = -\frac{1}{2kc^4}\eta^{\mu\nu}\partial_\mu\phi\partial_\nu\phi + \frac{1}{c^3}T\phi \quad (2.1)$$

である [1]。 k は定数である。また、

$$T := \eta_{\mu\nu}T^{\mu\nu} \quad (2.2)$$

であり、 $T^{\mu\nu}$ は物質場やゲージ場のエネルギー・運動量テンソルである。重力場の作用は、

$$S = \int d^4x \mathcal{L} \quad (2.3)$$

である。

質点系では、

$$T^{\mu\nu} = c \sum_A m_A \int d\tau_A \frac{dz_A^\mu}{d\tau_A} \frac{dz_A^\nu}{d\tau_A} \delta^4(x - z_A) \quad (2.4)$$

である。ここで、 A は質点のラベル、 z_A^μ は粒子の位置で、

$$d\tau_A^2 = -\frac{1}{c^2}\eta_{\mu\nu}dz_A^\mu dz_A^\nu \quad (2.5)$$

である。よって、

$$T = -c \sum_A m_A c^2 \int d\tau_A \delta^4(x - z_A) =: -\rho c^2 \quad (2.6)$$

となり、

$$\frac{1}{c^3}T\phi = -\frac{\rho}{c}\phi = -\phi \sum_A m_A \int d\tau_A \delta^4(x - z_A) \quad (2.7)$$

であり、(1.1) と整合する。

場の方程式は、

$$\eta^{\mu\nu}\partial_\mu\partial_\nu\phi = -kcT (= kc^3\rho) \quad (2.8)$$

である¹⁾。古典重力の方程式

$$\Delta\phi = 4\pi G\rho \quad (2.9)$$

と比較して、

$$k = \frac{4\pi G}{c^3} = \frac{c\kappa}{2} \quad (2.10)$$

である。 G は万有引力定数で、 $\kappa = 8\pi G/c^4$ はアインシュタイン定数である。

(A.31) によると、 $g_{\mu\nu} = \varphi^2\eta_{\mu\nu}$ に対するスカラー曲率は、

$$R = -\frac{6}{\varphi^3}\eta^{\mu\nu}\partial_\mu\partial_\nu\varphi \quad (2.11)$$

である。(2.8) と $\varphi = 1 + \frac{\phi}{c^2}$ より、

$$R = \frac{3\kappa}{\varphi^3}T = \frac{3\kappa}{\varphi}\mathcal{T} \quad (2.12)$$

となる。ここで、 $\mathcal{T} := g^{\mu\nu}T_{\mu\nu} = \varphi^{-2}T$ である²⁾³⁾。

¹⁾なお、重力の自己相互作用を考えると、場の方程式は、

$$\eta^{\mu\nu}\partial_\mu\partial_\nu\phi = -kc(T + T_G)$$

となる。 T_G は重力場のエネルギー・運動量テンソルのトレースである [1, 2]。

²⁾アインシュタイン方程式からは、 $R = -\kappa\mathcal{T}$ が得られる。ここで、 $\mathcal{T} := g^{\mu\nu}T_{\mu\nu}$ である。

³⁾Nordstrom の重力理論では、場の方程式は、

$$R = 3\kappa\mathcal{T} \iff \varphi\eta^{\mu\nu}\partial_\mu\partial_\nu\varphi = -\frac{\kappa}{2}\sqrt{-g}\mathcal{T} \iff \eta^{\mu\nu}\partial_\mu\partial_\nu\varphi = -\frac{\kappa}{2}\varphi\mathcal{T}$$

である [2]。ここで、 $g = \det(g_{\mu\nu}) = -\varphi^8$, $\sqrt{-g} = \varphi^4$ である。

3 近日点移動

この章では $c = 1$ とする。

3.1 一般論

今、一般に計量が、

$$g_{\mu\nu} = \eta_{\mu\nu} + h_{\mu\nu} \quad (3.1)$$

と書け、 $h_{\mu\nu}$ が十分小さく、

$$h_{\mu\nu} = \text{diag}(h_0, h_s, h_s, h_s) \quad (3.2)$$

となる場合を考える。特に、スカラー重力では、

$$h_0 = -2\phi - \phi^2, \quad (3.3)$$

$$h_s = 2\phi + \phi^2 \quad (3.4)$$

である。球対称で静的な場合を考える。 M を中心 ($r = 0$) にある星の質量とし、

$$\Phi := -2GM/r, \quad (3.5)$$

$$h_0 = -\alpha\Phi - a\Phi^2 + \mathcal{O}(\Phi^3), \quad (3.6)$$

$$h_s = -\beta\Phi - b\Phi^2 + \mathcal{O}(\Phi^3) \quad (3.7)$$

を仮定する。このとき、近日点の1周期ごとの歳差は、付録Bより、

$$\delta \approx \pi \frac{(2GM)^2}{L^2} (\alpha^2 + \alpha\beta - a) \quad (3.8)$$

である。 L は角運動量を表す定数である。

3.2 一般相対論での近日点移動

アインシュタイン方程式の解は、

$$g_{00} = -\left(1 + \frac{\Phi}{4}\right)^2 \left(1 - \frac{\Phi}{4}\right)^{-2}, \quad (3.9)$$

$$g_{ik} = \delta_{ik} \left(1 - \frac{\Phi}{4}\right)^4 \quad (3.10)$$

である [3]。よって、

$$\begin{aligned} h_0 &= 1 - \left(1 + \frac{\Phi}{4}\right)^2 \left(1 - \frac{\Phi}{4}\right)^{-2} \\ &= 1 - \left(1 + \frac{\Phi}{2} + \frac{\Phi^2}{16}\right) \left(1 + \frac{\Phi}{2} + \frac{3\Phi^2}{16} + \frac{\Phi^3}{16} + \dots\right) \\ &= -\Phi - \frac{1}{2}\Phi^2 - \frac{3}{16}\Phi^3 + \dots \end{aligned} \quad (3.11)$$

および、

$$\begin{aligned} h_s &= -1 + \left(1 - \frac{\Phi}{4}\right)^4 \\ &= -\Phi + \frac{3}{8}\Phi^2 + \frac{1}{16}\Phi^3 - \frac{1}{256}\Phi^4 \end{aligned} \quad (3.12)$$

を得る。よって、

$$(\alpha, \beta, a, b) = (1, 1, 1/2, -3/8) \quad (3.13)$$

であり、

$$\delta = \pi \frac{(2GM)^2}{L^2} \cdot \frac{3}{2} =: \delta_{\text{GR}} \quad (3.14)$$

である。

3.3 スカラー重力理論での近日点移動

スカラー重力では、 $\phi = \Phi/2$ なので、

$$(\alpha, \beta, a, b) = (1, -1, 1/4, -1/4) \quad (3.15)$$

であり、

$$\delta = \pi \frac{(2GM)^2}{L^2} \cdot (-1/4) = -\frac{1}{6}\delta_{\text{GR}} \quad (3.16)$$

となる。一般相対論と符号すら合わない。

A $g_{\mu\nu} = \varphi^2 \eta_{\mu\nu}$ に対するスカラー曲率

計量テンソルが、

$$g_{\mu\nu} = \varphi^2 \eta_{\mu\nu} \quad (\text{A.1})$$

の場合を考える。スカラー重力理論では、

$$\varphi = 1 + \frac{\phi}{c^2} \quad (\text{A.2})$$

である。

ところで一般に、計量テンソルは、フレーム形式と呼ばれる1形式の組 $\{\theta^a\}_{a=0,1,2,3}$ を用いて、

$$g = \eta_{ab} \theta^a \otimes \theta^b, \quad \eta_{ab} := \text{diag}(-1, 1, 1, 1) \quad (\text{A.3})$$

と書ける。 η_{ab} はミンコフスキー計量である。フレーム形式を、

$$\theta^a = \theta^a_{\mu} dx^{\mu} \quad (\text{A.4})$$

と書いたとき、 θ^a_{μ} は多脚場と呼ばれる。(A.1) の場合は、

$$\theta^a_{\mu} = \varphi \delta^a_{\mu} \quad (\text{A.5})$$

である。レビ=チビタ接続 A^a_b は、

$$d\theta^a = -A^a_b \wedge \theta^b \quad (\text{A.6})$$

を満たす。今、

$$d\theta^a = \frac{1}{2} \Delta^a_{bc} \theta^b \wedge \theta^c \quad (\text{A.7})$$

とおくと、

$$A_{ab} = A_{abc} \theta^c, \quad (\text{A.8})$$

$$A_{abc} := \frac{1}{2} (\Delta_{cba} + \Delta_{abc} + \Delta_{bca}) \quad (\text{A.9})$$

となる [4]。曲率テンソルは、

$$F^a_b = dA^a_b + A^a_c \wedge A^c_b \quad (\text{A.10})$$

である。

$$F^a_b =: \frac{1}{2} R^a_{bcd} \theta^c \wedge \theta^d \quad (\text{A.11})$$

とおき、

$$R_{ab} := R^c_{acb}, \quad (\text{A.12})$$

$$R := \eta^{ab} R_{ab} \quad (\text{A.13})$$

とする。 η^{ab} は η_{ab} の逆行列である。 R はスカラー曲率である。 $*$ をホッジ双対とすると、

$$F_{ab} \wedge *(\theta^a \wedge \theta^b) = R * 1 \quad (\text{A.14})$$

となる。なお、

$$\theta^a \wedge \theta^b \wedge *(\theta^c \wedge \theta^d) = (\eta^{ac}\eta^{bd} - \eta^{ad}\eta^{bc}) * 1 \quad (\text{A.15})$$

である [4]。

今は、

$$\theta^\mu = \varphi dx^\mu \quad (\text{A.16})$$

なので、

$$\begin{aligned} d\theta^\mu &= \partial_\nu \varphi dx^\nu \wedge dx^\mu \\ &= \frac{\partial_\alpha \varphi}{\varphi^2} \delta^\mu_\beta \theta^\alpha \wedge \theta^\beta, \end{aligned} \quad (\text{A.17})$$

$$\Delta^\mu_{\alpha\beta} = \frac{\partial_\alpha \varphi}{\varphi^2} \delta^\mu_\beta - \frac{\partial_\beta \varphi}{\varphi^2} \varphi \delta^\mu_\alpha, \quad (\text{A.18})$$

$$\Delta_{abc} = \frac{\partial_b \varphi}{\varphi^2} \eta_{ac} - \frac{\partial_c \varphi}{\varphi^2} \eta_{ab} \quad (\text{A.19})$$

であり、

$$\begin{aligned} A_{abc} &= \frac{1}{2}(\Delta_{abc} + \Delta_{bca} + \Delta_{cba}) \\ &= \frac{1}{\varphi^2}(\partial_b \varphi \eta_{ac} - \partial_a \varphi \eta_{bc}) \end{aligned} \quad (\text{A.20})$$

であるから、

$$\begin{aligned} A_{ab} &= \frac{1}{\varphi}(\partial_b \varphi \eta_{ac} - \partial_a \varphi \eta_{bc}) dx^c \\ &= (\partial_b \ln \varphi \eta_{ac} - \partial_a \ln \varphi \eta_{bc}) dx^c \end{aligned} \quad (\text{A.21})$$

であり、

$$\begin{aligned} dA_{ab} &= -(\partial_d \partial_b \ln \varphi \eta_{ac} - \partial_d \partial_a \ln \varphi \eta_{bc}) dx^c \wedge dx^d \\ &= -\frac{1}{\varphi^2}(\partial_d \partial_b \ln \varphi \eta_{ac} - \partial_d \partial_a \ln \varphi \eta_{bc}) \theta^c \wedge \theta^d \end{aligned} \quad (\text{A.22})$$

となる。また、 $\lambda_a := \partial_a \ln \varphi$ とすると、

$$\begin{aligned} G_{ab} &:= \eta^{ef} A_{ae} \wedge A_{fb} \\ &= \eta^{ef} (\lambda_e \eta_{ac} - \lambda_a \eta_{ec})(\lambda_b \eta_{fd} - \lambda_f \eta_{bd}) dx^c \wedge dx^d \\ &= (\lambda_d \lambda_b \eta_{ac} - \lambda^2 \eta_{ac} \eta_{bd} - \lambda_a \lambda_b \eta_{dc} + \lambda_a \lambda_c \eta_{bd}) dx^c \wedge dx^d \\ &= \frac{1}{\varphi^2} (\lambda_d \lambda_b \eta_{ac} - \lambda^2 \eta_{ac} \eta_{bd} + \lambda_a \lambda_c \eta_{bd}) \theta^c \wedge \theta^d \end{aligned} \quad (\text{A.23})$$

である。ここで、 $\lambda^2 := \eta^{ab} \lambda_a \lambda_b$ である。

よって、

$$\begin{aligned} dA_{ab} \wedge *(\theta^a \wedge \theta^b) &= -\frac{1}{\varphi^2} (\partial_a \partial_b \ln \varphi \eta_{ac} - \partial_a \partial_a \ln \varphi \eta_{bc}) (\eta^{ac} \eta^{bd} - \eta^{ad} \eta^{bc}) * 1 \\ &= -\frac{2(D-1)}{\varphi^2} \square \ln \varphi * 1 \end{aligned} \quad (\text{A.24})$$

である。ここで、

$$\square \bullet := \eta^{ab} \partial_a \partial_b \bullet \quad (\text{A.25})$$

である。 $D = 4$ は次元である。また、

$$\begin{aligned} G_{ab} \wedge *(\theta^a \wedge \theta^b) &= \frac{1}{\varphi^2} (\lambda_d \lambda_b \eta_{ac} - \lambda^2 \eta_{ac} \eta_{bd} + \lambda_a \lambda_c \eta_{bd}) (\eta^{ac} \eta^{bd} - \eta^{ad} \eta^{bc}) * 1 \\ &= \frac{1}{\varphi^2} (D - D^2 + D - 1 + D - 1) \lambda^2 * 1 \\ &= -\frac{(D-1)(D-2)}{\varphi^2} \lambda^2 * 1 \end{aligned} \quad (\text{A.26})$$

である。

よって、

$$R = -\frac{2(D-1)}{\varphi^2} \left(\square \ln \varphi + \frac{1}{2} (D-2) \lambda^2 \right) \quad (\text{A.27})$$

である。ここで、

$$\begin{aligned} \square \ln \varphi &= \eta^{\mu\nu} \partial_\nu \left(\frac{\partial_\mu \varphi}{\varphi} \right) \\ &= \frac{\square \varphi}{\varphi} - \lambda^2 \end{aligned} \quad (\text{A.28})$$

なので、

$$\square \ln \varphi + \frac{1}{2} (D-2) \lambda^2 = \frac{\square \varphi}{\varphi} + \frac{1}{2} (D-4) \lambda^2, \quad (\text{A.29})$$

$$R = -\frac{2(D-1)}{\varphi^3} \square \varphi - \frac{(D-1)(D-4) \lambda^2}{\varphi^2} \quad (\text{A.30})$$

となる。 $D = 4$ なので、

$$R = -\frac{6 \square \varphi}{\varphi^3} \quad (\text{A.31})$$

である。

B 近日点移動：詳細

§ 3.1 の設定で考える。 $c = 1$ とする。この章は [5] を参考にした。
パラメーター τ を、

$$g_{\mu\nu} \frac{dx^\mu}{d\tau} \frac{dx^\nu}{d\tau} = -1 \quad (\text{B.1})$$

と選ぶと、質点の運動方程式は、

$$\frac{d}{d\tau} \left[(\eta_{\sigma\nu} + h_{\sigma\nu}) \frac{dx^\sigma}{d\tau} \right] = \frac{1}{2} \partial_\nu h_{\mu\sigma} \frac{dx^\mu}{d\tau} \frac{dx^\sigma}{d\tau} \quad (\text{B.2})$$

となる。(B.2) の空間成分 ($i = 1, 2, 3$) は、

$$\frac{d}{d\tau} \left[(1 + h_s) \dot{x}^i \right] = \frac{1}{2} \left[\partial_i h_0 \dot{t}^2 + \partial_i h_s (\dot{x}^2 + \dot{y}^2 + \dot{z}^2) \right] \quad (\text{B.3})$$

となる。ここで、 $\dot{X} := dX/d\tau$, $t = x^0$ である。(B.2) の時間成分は、

$$\frac{d}{d\tau} \left[(1 - h_0) \dot{t} \right] = 0 \quad (\text{B.4})$$

となる。ここで、

$$\partial_0 h_{\mu\nu} = 0 \quad (\text{B.5})$$

を仮定した。

(B.1) は、

$$(1 - h_0) \dot{t}^2 - (1 + h_s) (\dot{x}^2 + \dot{y}^2 + \dot{z}^2) = 1 \quad (\text{B.6})$$

である。ところで、(B.4) より、

$$(1 - h_0) \dot{t} = K = \text{const.} \quad (\text{B.7})$$

である。これと (B.6) より、

$$\frac{K^2}{1 - h_0} - (1 + h_s) (\dot{x}^2 + \dot{y}^2 + \dot{z}^2) = 1 \quad (\text{B.8})$$

である。

ところで、

$$\frac{d}{d\tau} \left[(1 + h_s) (\dot{x}^i x^k - \dot{x}^k x^i) \right] = \frac{d}{d\tau} \left[(1 + h_s) \dot{x}^i \right] x^k - \frac{d}{d\tau} \left[(1 + h_s) \dot{x}^k \right] x^i \quad (\text{B.9})$$

である。今、 h_0, h_s が $r = \sqrt{x^2 + y^2 + z^2}$ のみの関数とすると、(B.3) の右辺は x^i に比例する。
よって、上式の右辺は 0 である：

$$\frac{d}{d\tau} \left[(1 + h_s) (\dot{x}^i x^k - \dot{x}^k x^i) \right] = 0. \quad (\text{B.10})$$

これは角運動量の保存則である。特に、

$$L_1 := (1 + h_s)(\dot{z}y - \dot{y}z), \quad (\text{B.11})$$

$$L_2 := (1 + h_s)(\dot{x}z - \dot{z}x), \quad (\text{B.12})$$

$$L_3 := (1 + h_s)(\dot{y}x - \dot{x}y) =: L \quad (\text{B.13})$$

は保存する。

今、 $L_1 = L_2 = 0$ を仮定する。この時、極座標表示で、 $\varphi = \pi/2$ ($\dot{\varphi} = 0$) である⁴⁾。また、

$$L = (1 + h_s)r^2\dot{\theta}, \quad (\text{B.14})$$

$$\dot{x}^2 + \dot{y}^2 + \dot{z}^2 = r^2\dot{\theta}^2 + \dot{r}^2 = r^2\dot{\theta}^2 + \left(\frac{dr}{d\theta}\right)^2\dot{\theta}^2 \quad (\text{B.15})$$

である。(B.15) より、

$$\frac{K^2}{1 - h_0} - (1 + h_s)\dot{\theta}^2 \left[r^2 + \left(\frac{dr}{d\theta}\right)^2 \right] = 1 \quad (\text{B.16})$$

である。また、(B.14) より、

$$\dot{\theta} = \frac{L}{(1 + h_s)r^2} \quad (\text{B.17})$$

なので、

$$\frac{K^2}{1 - h_0} - \frac{L^2}{(1 + h_s)r^4} \left[r^2 + \left(\frac{dr}{d\theta}\right)^2 \right] = 1 \quad (\text{B.18})$$

となる。今、

$$u := \frac{1}{r} \quad (\text{B.19})$$

とすると、

$$\frac{du}{d\theta} = -u^2 \frac{dr}{d\theta}, \quad (\text{B.20})$$

$$\frac{1}{r^4} \left(\frac{dr}{d\theta}\right)^2 = \left(\frac{du}{d\theta}\right)^2 \quad (\text{B.21})$$

なので、

$$\frac{K^2}{1 - h_0} - \frac{L^2}{(1 + h_s)} \left[u^2 + \left(\frac{du}{d\theta}\right)^2 \right] = 1, \quad (\text{B.22})$$

$$u^2 + \left(\frac{du}{d\theta}\right)^2 = \left(\frac{K^2}{1 - h_0} - 1\right) \frac{1 + h_s}{L^2} \quad (\text{B.23})$$

を得る。

⁴⁾ここでの θ, φ は多くの文献と逆である。つまり、ここでの φ は通常は θ と書かれるものである。

今、 M を中心 ($r = 0$) にある星の質量とし、

$$\Phi := -2GMu, \quad (\text{B.24})$$

$$h_0 = -\alpha\Phi - a\Phi^2 + \mathcal{O}(\Phi^3), \quad (\text{B.25})$$

$$h_s = -\beta\Phi - b\Phi^2 + \mathcal{O}(\Phi^3) \quad (\text{B.26})$$

を仮定する。このとき、

$$\begin{aligned} \frac{K^2}{1-h_0} - 1 &= K^2(1 - \alpha\Phi - a\Phi^2 + \alpha^2\Phi^2 + \dots) - 1 \\ &= K^2 - 1 - K^2\alpha\Phi + K^2(\alpha^2 - a)\Phi^2 + \dots, \end{aligned} \quad (\text{B.27})$$

$$\begin{aligned} \left(\frac{K^2}{1-h_0} - 1\right) \frac{1+h_s}{L^2} &= \frac{K^2-1}{L^2} - \frac{K^2\alpha}{L^2}\Phi + \frac{K^2}{L^2}(\alpha^2 - a)\Phi^2 \\ &\quad - \frac{K^2-1}{L^2}\beta\Phi - \frac{K^2-1}{L^2}b\Phi^2 + \frac{K^2\alpha\beta}{L^2}\Phi^2 + \mathcal{O}(\Phi^3) \\ &= A + Bu + Cu^2 + \dots \end{aligned} \quad (\text{B.28})$$

となる。ただし、

$$A = \frac{K^2 - 1}{L^2}, \quad (\text{B.29})$$

$$B = \frac{2GM}{L^2} [K^2\alpha + (K^2 - 1)\beta], \quad (\text{B.30})$$

$$C = \frac{(2GM)^2}{L^2} [K^2(\alpha^2 + \alpha\beta - a) - (K^2 - 1)b] \quad (\text{B.31})$$

である。よって、

$$u^2 + \left(\frac{du}{d\theta}\right)^2 = A + Bu + Cu^2 + \dots \quad (\text{B.32})$$

となる。これを θ で微分して、 \dots を無視すると、

$$u + \frac{d^2u}{d\theta^2} = \frac{1}{2}B + Cu, \quad (\text{B.33})$$

$$\frac{d^2u}{d\theta^2} = \frac{1}{2}B - (1 - C)u \quad (\text{B.34})$$

を得る。

$$u = \frac{B}{2(1-C)} + v \quad (\text{B.35})$$

とすると、

$$\frac{d^2v}{d\theta^2} = -(1 - C)v \quad (\text{B.36})$$

となる。この解は、

$$v = v_0 \cos(\sqrt{1-C}\theta) + v_1 \sin(\sqrt{1-C}\theta) \quad (\text{B.37})$$

であり、近日点は、角度が

$$\frac{2\pi}{\sqrt{1-C}} = 2\pi + C\pi + \mathcal{O}(C^2) \quad (\text{B.38})$$

変化するたびに現れる。近日点の1周期ごとの歳差は、

$$\begin{aligned} \delta &= C\pi = \pi \frac{(2GM)^2}{L^2} \left[K^2(\alpha^2 + \alpha\beta - a) - (K^2 - 1)b \right] \\ &\approx \pi \frac{(2GM)^2}{L^2} (\alpha^2 + \alpha\beta - a) \end{aligned} \quad (\text{B.39})$$

である。ここで、 $K^2 \approx 1$ とした。

References

- [1] A. Vecchiato, “Variational Approach to Gravity Field Theories”, Springer (2017).
- [2] T. Ortin, “Gravity and Strings”, Cambridge University Press (2004).
- [3] 内山龍雄 『相対性理論』 (岩波書店, 1977年).
- [4] 中嶋慧, 松尾衛 『一般ゲージ理論と共変解析力学』 (現代数学社, 2020年).
- [5] ファインマン, モリニーゴ, ワーグナー (著), 和田純夫 (訳) 『ファインマン講義重力の理論』 (岩波書店, 1999年).